

聖なる樹々（下）

——ラフカディオ・ハーン「青柳物語」と「十六桜」について——

牧 野 陽 子

三、「十六桜」——樹下の切腹

「十六桜」は、枯れた桜の樹を自らの命を絶つことで救い、再び花を咲かせた老武士の話である。きわめて短いものなので、次に全文の訳を引く。

伊予の国の和氣郡わけごおりに、十六桜と呼ばれる有名な桜の老樹がある。そう呼ばれるのは、陰暦の正月十六日になると花が咲くからで、しかもその日にしか咲かないからである。桜が咲くのは普通、春が来るのを待つてかかるだが、この樹は大寒の最中に花が咲く。しかし十六桜は自分の命の力で咲くのではない。自分のものではない——少なくとも元々は自分ではなかった——別の命の力で花が咲く。この樹にはある人の霊が宿っているのである。

聖なる樹々（下）

聖なる樹々（下）

その人は伊予の侍であつた。その樹は侍の家に生えていて、他の桜と同様、三月末か四月の初めに花をつけた。侍は子供のころその樹下で遊んだ。もう百年以上も、花の季節になると父母も祖父母も、またその親も先祖代々、桜を讀える漢詩や和歌を色とりどりの短冊に記しては、満開のその樹の枝に結んできたのだ。だが、いまは侍もたいそう老いて、子供たちにもみな先立たれてしまった。そうになると、この世に愛するものは、もはやこの樹をおいてほかにない。ところが、あるまいことか、ある年の夏、樹は枯れて死んでしまったのである。

老人は深く心をいためた。見かねた近所の人々が親切にも美しい桜の若樹を見立てて老人の庭に植えてくれた。そうすれば慰めになろうかと思つたのである。老人は近所の人に礼を言い、嬉しそうな様子をしてみせた。しかしその実、嘆き悲しみで胸はいっぱいであつた。あれほど心にかけて老樹であつてみれば、何ものもそれを失つた嘆きに代わる慰めとはならない。

ついに妙案が浮かんできた。こうすれば枯れた樹を救えるかもしれないという方策を老人は思いついたのである。それは正月十六日であつた。老人はひとりで庭へ出ると、枯れた樹の前で一礼し、こう話しかけた。

「お願いです。いま一度花を咲かせて下さい。——私があなたの身代わりになつて死にます」。〔神明の加護により、人は自分の命を他の人、他の生き物や樹木に対しても譲り渡すことが本来出来ると信じられている。だから自分の命を他へ転移することを日本語で「身代わりに立つ」と言うのである。〕それから侍は桜の下に白布や敷物を広げ、そこに正座すると、武家の作法にのっとり腹を切つた。すると、侍の霊は樹にのりうつり、即座に老樹に花を咲かせたのである。

そしてそれからというもの、毎年、正月十六日、雪の季節のさなかに、その桜には今も花が咲くのである。⁽¹³⁾

「十六桜」とは、伊予の国に実際にあった有名な寒咲きの桜である。その名木にまつわる言い伝えを物語るという形の平易で淡々とした語り口で、静けさの背後に何か烈しいものが漂うこの話は始まる。

すべてがまだ冬の奥に固く閉ざされた大寒の最中に、一早く花を咲かせる寒咲きの桜は、それだけで尊く、神秘的な存在である。ところが、十六桜に秘められているのは、実は「自分のものではない、別の命の力」に他ならない、

“There is the ghost of a man in that tree.” (この樹には、人の霊が宿っている) とハーンは言う。

霊が宿る特別な樹なのだということを、簡明直接的な表現で述べ、一行の空白を置いている。ただならぬ雰囲気漂わせた桜の老樹のイメージを巧みに提示した後に、言い伝えが語られ、その樹に宿っている人の霊魂とは、その桜をこよなく愛したがために身代わりに命を絶った老武士の魂だとわかる。

ハーンが素材とした原話は、『文藝倶楽部』第七卷三号(明治三十四年二月)の「諸国奇談」六篇のひとつで、「愛媛 淡水生」という人の「十六日櫻」である。

「伊予国温泉郡山越村竜穂寺の境内に十六日桜と言う一つの桜樹あり……」と始まって、昔から文人墨客、天皇までがこの花を訪ねて愛でてきたことを述べ、「諸君も道後温泉に入浴の際には一度杖を曳き賜え何でも道後よりは二十町に不足^{たらぬ}そうな」と終わる、いわば地元の名所旧跡の縁起を記した短い文章である。早咲きの由来の部分は、

聖なる樹々（下）

往昔此里に花を愛する翁ありしが、或年の正月十六日、此樹下にたたずみて「吾が齢已に八旬に余りたれば、また花咲く春に逢ふこともあるらんか」と独言せしに不思議や桜樹忽ち二三の蕾綻びければ、翁の喜び言はんかたなく見る人皆涙を催しける。実に草木さへも心ありて其情に感ぜしならん、夫より今に至る迄日を違えず蕾を結び花咲くと言ふ。⁽¹⁵⁾

となつていて、桜は老木だというわけではなく、また枯れたその樹の身代わりに老人が死ぬという部分もまったくない。竜穩寺の十六桜に関する記述は『諸国怪人談』（菊岡沾涼著）など当時の他の書物にもあるが、そこでも内容はただ、病に伏した寺の老僧が、慈しんできた樹に向かつて「花を見るまでは存命^{ながら}ふべからずと名残を惜しみ」、すると季節を早めて花が咲いたというだけである。⁽¹⁶⁾

この寒桜伝説に類した言い伝えは、おそらく珍しいものではなく、日本各地にあるのかもしれない。その主眼は、もちろん、「実に草木さへも心ありて其情に感ぜしならん」という一点である。『平家物語』の中の桜町中納言のエピソードでも、中納言が花の命の短いことを惜しんで神に祈ると、屋敷内の桜が、普通は七日で散るのを、「花も心ありければ、二十日の齢を保ちけり」と結ばれている。⁽¹⁷⁾

このように花や樹にも心があり、花を見たいと願う人の気持ちに応えるという感応話は、話としては単純であるが、そこには日本人の基本的な植物観を反映していることを思わせるさりげなさ^{（18）}と穏やかな優しさ^{（19）}が感じられる。

そこにハーンは、原話にはない、身代わりとなるための「樹下の切腹」という要素を付け加えた。

ハーンは、文中に「身代わりに立つ」という日本語をそのまま用いており、この言葉に強くひかれたことが察せられる。そして、他者のために自己を犠牲にする精神を「旧日本」特有の尊い美德であるとハーンが考えていたことは、これまでも指摘されてきた通りである。「ハル」「君子」「勇士」などに、そのような生き方をした人の哀れ深い話が描かれており、「十六桜」で、枯死寸前の桜の樹を救うために命を絶った老武士の行為にも、たしかに、同じ気高さと悲しさがある。⁽¹⁸⁾

ただハーンは、侍の死を、自己犠牲としてのみ捉えていたのではない。侍が死を決意する台詞の後にハーンは次のように説明を加えている。

it is believed that one can really give away one's life to another person, or to a creature, or even to a tree....and thus to transfer one's life is expressed by the term 'migawari-ni-tatsu', 'to act as substitute'. (人は自分の命を他の人、他の生き物や樹木に対しても譲り渡すことが本当に出来ると信じられている。だから自分の命を他へ転移することを、日本語で「身代わりに立つ」と言うのである。)

ここでハーンは「身代わりに立つ」という言葉に対して、'to act as substitute' (人の身代わりとなる) という直訳を添えているものの、その前に自らの言葉として述べている、'to transfer one's life' (自分の命を他へ転移すること) の方にむしろハーンの力点が置かれているように思われる。

つまり、ハーンは老武士の死の真の意味を、自己の生命の転移と解したのではないか。武士は自ら命を絶つ

聖なる樹々（下）

が、その結果、他者の生とひきかえに己が身の滅却を甘んじて受け入れるわけではない。老武士は霊となって樹木に乗り移る。

“There is the ghost of a man in that tree.”——先に引用した、このいかにも直截な表現が、樹霊となって樹の中に再生した武士の姿を映し出して生きてくる。しかも、この動詞の現在時制 “There is” は、霊の存在の事実をただ示すのではなく、その存在がいわば時を超えて不変にあるものとして、現在も未来も続いていくことを示唆する。老武士は、樹の中で、永遠に生き続けるのである。

ハーンは「十六桜」を樹木への転生の物語として語ったのだと、まずは指摘できよう。そしてこの物語を、他のいわゆる樹木変身譚や死体化生伝説の中に置いてみると、ハーンの「十六桜」⁽¹⁹⁾ かもつ物語としてのインパクトが明らかになる。

植物にまつわる話として、非業の死を遂げた死者の灰や血、墓から花や木が生え出て、その中で死者の魂が生き続けるという伝説は、洋の東西をとわず世界各地にみられるという。⁽¹⁹⁾ また、中世のトリスタンとイゾルデの悲恋物語のように、不幸な恋人たちの墓から生れた草木が互いに向かつて伸び、枝や蔓を絡み合わせ、二人が永遠に結ばれたことを示唆するという形の話も、トリスタン伝説の発祥地とされるアイルランドをはじめ、類話が少なくない。⁽²⁰⁾ このような古今東西の植物の神話伝説を研究収集した書物⁽²¹⁾ がヘルン文庫に残っており、ハーンは「青柳物語」同様「十六桜」の再話にあたっても、当然、古代より様々に語られてきた樹木への再生譚を念頭においていたものと思われる。

古来、樹々は自然の永遠の生命力を象徴し、また冬の死から春の新たな命へと生命の再生を象徴するものでも

あった。死して樹木に生まれ変わるといふ伝説には、不本意な死を遂げた者に対する鎮魂と浄化の意味も込められていよう。ギリシャ神話の中の、アネモネや水仙、月桂樹、糸杉などへの変身譚も、神々がそれぞれの物語の主人公を哀れに思つて花や樹に変えたのである。

だが、そうした再生譚と異なり、「十六桜」の老武士の死は不本意なものではない。死後、ただ結果として樹木に再生したのでもない。本人が意図して自ら死に、霊が桜の樹に乗り移ったのである。その意図の大胆さと強さが、物語の表面的な静けさに烈しさをにじませている。切腹という様式化された死の形は、ここに、武士的行動というより、樹木への意志的な転生の儀式としての意味において、生彩を放つのではないだろうか。

老人は樹の下に真っ白な布を広げ、武家の作法の通りに、腹を切る。すると、

“the ghost of him went into the tree, and made it blossom in that same hour.”（侍の霊は樹の中にすつと入っていき、即座に花を咲かせた）、という。

ここにハーンが冒頭に提示した、樹の中の霊にまつわる経緯が明らかにされ、再現される。侍の体から抜け出した靈魂が、樹の中に吸い込まれるように乗り移ると、一度は枯れた樹にたちまちにして生氣が戻り、見るまに蓄がほころんで花が開いていくのである。そしてここで言及はないが、当然腹を切った瞬間、純白の敷物に赤い鮮血が飛び散つただろうことは、想像にかたくない。むしろ暗黙の了解として伏せられているからこそ、今なお大寒の時期に毎年花を咲かせ続ける美しい桜樹の姿の後方に、その凄烈な転生の儀式的映像が幻影のように重なってくる。桜の花びらのほんのり染まつた薄紅色が、まさに温かな血が通っているがごとく、息づいてみえるのである。

聖なる樹々（下）

「青柳物語」の若者は最後に山々の聖域に入って樹々の世界と結ばれるが、「十六桜」の老武士は、より端的に烈しく、死ぬことで桜の樹と一体化し、永遠の生を共に得る。では、何がこの主人公に、自らの命を絶つてまでそう望むようにさせたのか。

前述したように「十六桜」の原話では、現在は寒桜の老樹として名高いこの樹も、はるか昔、花を見たいという老人の願いに応えて冬咲きになったその時点では、特に樹齢をへていたわけではない。だがハーンの再話では、桜は百年以上の時を経た老樹である。その桜は庭にあり、侍にとつては子供のころをその樹下で遊んですごした樹だった。隣家の人が美しい若木をかわりに植えても侍の心は癒されなかった、という原話にない一節を付け加えたのは、老樹であることの重要性を強調するためだろう。

ところでハーンは神戸時代、怪談を再話して一卷にまとめる事を考えていたころ、アメリカの出版社ホートン社あてにその構想のことを述べて、ついでにアンデルセンを読み直したいので本を送ってくれるよう、依頼している。「私は読みました。そして心の中が感動で渦巻きました」と、ハーンはチェンバレン宛の手紙に記し、アンデルセンの「大きな空想力、素朴な魔術、驚くべき圧縮力」にあらためて感嘆したこと、「その靈感の泉に学びたい」と思っていることを述べた。⁽²²⁾後の、東大での文学講義「散文芸術論」の中でもアンデルセンを「並ぶ者のない童話の語り手、深遠な哲学的意味に満ちた不思議な物語の語り手」⁽²³⁾であると述べていて、高い評価は変わらない。

そのH・C・アンデルセンに「柳の樹の下で」⁽²⁴⁾という作品がある。ハーンはアンデルセンの童話に感銘を受けたことを告白しているものの、個別の作品には、あまり言及していない。したがって、この「柳の樹の下で」に

いかなる感想を抱いたかは推測の域を出るものではないが、興味深いのは、ここに登場する老樹の存在である。物語の主人公の青年クヌートは幼なじみのヨハンネとの恋に破れ、何年もの放浪の果てに力尽きる。そして冬、雪の降り積もる異国の村の柳の樹の下で凍死するのだが、その時、その柳の樹が上から自分の方に枝を下げてくれるを感じる。樹は力強い老人の姿と化していた。それは、若者を探しに来てくれた故郷の柳の老樹の樹霊に他ならなかった。クヌートは子供のころ、小川がそばに流れる家の庭の、この柳の樹の下でいつも遊んで過ごしたのである。そして、柳の老人は若者を優しく両腕に抱きあげると、その魂を祖国の小川のほとりへ、幼い日の庭へと連れていく。そこには昔のままのヨハンネが微笑んで待っていた。異国の冬景色の中に柳の樹霊が紡ぎ出す、青々とした夏の故郷の夢につつまれて、若者は息を引き取る。

アンデルセンのこの作品では、柳の老樹は、父母の待つ故郷と、あどけなく遊んだ幸せな幼年期の象徴であり、最後にそこに回帰しようとした主人公を受け止め、癒し、救う存在として美しく描かれている。

そしてハーンの「十六桜」においても、待にはクヌートと同じように子供のころ庭の桜の樹下で遊んだ思い出があればこそ、その樹に対する愛着がある。だがハーンの視点は、そこにとどまらない。さらに過去へと遡っていく。「父母も祖父母も、またその親も先祖代々」桜を讃え、色とりどりの短冊を満開の枝に結んで、同じように花の季節を送ってきたことに思いが及ぶのである。そして待は、そのような樹だからこそ、そのために切腹して乗り移り、再生させた。

老樹のもとで、季節が繰り返され、人々の生が繰り返されていく。それは「阿弥陀寺の比丘尼」(『心』)の中に描かれた、お地藏様が見守るなかで代々の子供たちがくり返し遊ぶ光景を髣髴とさせる。満開の桜の下は阿弥

聖なる樹々（下）

陀寺の境内と同じく、時間が流れ、反復され、蓄積された、ひとつの聖なる空間なのだといえる。桜の老樹は、その空間も、時間も、いわばこの世の生命の営みすべてを包み込んでいるのである。そしてハーンは、春まだき雪の中に咲く冬の桜とは、そのような樹木の聖性をまさしく世に顕現した姿に他ならないととらえたのではないだろうか。

「十六桜」の話は、

“And every year it still blooms...in the season of the snow.”

（それ以来、その桜は今もなお毎年、雪の季節に花を咲かせるのである。）と結ばれ、ほの暗い闇の中にそこだけ春の陽が明るく射しているような、冬の桜の神秘性を最後に再び浮かび上がらせて、終わる。

「十六桜」とは、悠久の時を内包した樹木と向かいあい、老樹への転生を果たすことで、樹木の聖なる空間を目に見える形で世にあきらかにした一人の人間の物語である。静かで清冽な美しさの中に潜む、樹下の切腹のインパクトが読者の脳裏に残るのは、凝縮されたその一瞬の人間の行為が、永遠を永遠としてあらわしめたからなのではないかと思われる。

四、樹々の原風景

「青柳物語」は、吹雪の中、柳の老樹が丘の上に姿を現して始まり、「十六桜」は、雪のころに花を咲かせる

桜の古木の姿を最後に映し出す。冬の季節を背景にしたふたつの樹木の物語は照応しあうかのように、人間に与つての樹木の聖性を描いている。かたや桜がこの世の生の営みの繰り返しを包みこむ。その営みが繰り返しの中で昇華され、夢幻のごとくそこに立ち現れた物語を今度は柳がすくいとつて照らし出す。そして、柳の樹が若者をいざない、対する老武士が桜の樹の中に命をぬりこめる。こうしていずれの物語においても、最後に、樹木の聖なる空間の中に人間は吸いこまれていく。

ハーンが来日後、日本の風土を描写し、樹木の印象を記した文章の中で、樹々の美しいたたずまいに感嘆し、樹の中に息づく樹霊の存在を感じとつて安らいでいたことは、すでに述べた通りである。

では、来日以前のハーンは、樹木をどのようなイメージで捉えていたのだろうか。

アメリカ時代、ニューオーリーonzの地方紙『アイテム』に掲載された「万聖節の夜」⁽²⁵⁾という小品は、死者の霊が戻るという万聖節の夜の、墓地の幻想的な光景を散文詩風に綴つたものである。夜、月光に照らされた墓地を風が吹き抜け、墓の間の「影たち」に囁きかける。もの言わぬ影にかわつて、糸杉の樹々と供えられた花々が囁き返すうち、空が白んで風は飛び去っていく。この詩の中では、死者の霊と風、樹々、花々が語りあい、ハーンは花から立ち上る香りを花から抜け出たその魂に見立て、「花の魂」という言葉を再三繰り返す。植物にも靈魂を見出すハーンの感性をそこに指摘できようが、ここではまだ、詩の技法として擬人法を駆使したという要素の方が強いといえるだろう。

そのハーンが樹木の霊的な生命力そのものを直視して語りだすのは、西インド諸島に行つてからである。『仏領西インド諸島の二年間』(一八九〇年)冒頭の紀行文「真夏の熱帯行」の中で、ハーンは熱帯の樹々と森林から

聖なる樹々（下）

受けた強烈な印象について、次のように記した。

熱帯の森の何たるかは、頭上千フィートの高さまで緑が美しく伸び上がっている様を見上げているうちに、畏怖と共にわかつてくる。樹の実体というよりは樹の幻がはるか高くに聳え、怪物の群れと化して上から見下ろし、うなずき、体をかがめ、巨大な膝を突き出し、背中や肩の曲線をあらわにし、緑の腕をさしだし、手足を不気味に絡ませあつて⁽²⁶⁾いる。

ここで樹々は不気味にそびえ立つ化け物の群にたとえられている。群れなす緑の化け物が上の方で身をくねらせ、うごめき、絡みあう。その光景を下から見上げてハーンは、威圧されるような圧迫感と畏怖の念を感じた。また、森に棲む魔女にまつわる話「ラ・ギアブレス」の中でも、樹々の何ともいえぬ不気味で恐ろしい姿形にふれた上で、「北国では樹は単なる樹にしかすぎない。だが南国では樹は霊を帯びた人格で、その霊性がおのずと⁽²⁷⁾感じられる」と述べた。注目すべきは、ハーンの中で樹々の形の恐ろしさとその霊性が一体のものとしてとらえられていることだろう。

そして、なぜそのように感じたのか、「ゴシックの恐怖」⁽²⁸⁾（影）という晩年の自伝的エッセイにおいて、自らの心理が分析されている。

ハーンは子供のころ、ひんぱんに教会に連れていかれ、そこでいつも強い恐怖感にかられたことを回想する。ゴシック大聖堂の内陣の形状に悪夢の化け物を連想し、「なにか定めがたい生命の印象」を覚えたというのであ

る。その実体が何か、ハーンはずっと気になったという。だが、ゴシック建築の構造が天をめざすキリスト教信仰の視覚的表現であるがゆえの宗教的畏怖感だという説にも、またゴシック教会の内部が巨大な怪獣の骸骨に似ているという説にも今ひとつ納得できないでいた。ところが後年、西インド諸島でその謎が解ける。ハーンが熱帯の森の中に入り、椰子の樹の群れが天を目指して聳える「恐ろしくも美しい非日常的な生命の光景」を眺めていると、突然樹々の幹が巨大な側廊の柱列に見えてきて、幼なき日と同じ恐怖感にとらわれた。その時ハーンは、ゴシック様式のアーチは成長繁茂する植物の曲線に、教会の内部が森に似ていると思いあたる。そして、教会の内陣と熱帯の森に共通するのは、「上へ上へと伸びていく」動きと、その「異様な動きの恐怖感」に他ならないと結論づける。

厳格なカトリック教徒の大叔母のもとで育てられたハーンが、孤独な少年時代を送り、無理強いされたカトリック信仰への反発を次第に強めていったことは周知の通りである。そして晩年のエッセイ「ゴシックの恐怖」からわかるのは、ハーンにとってゴシック様式の教会内部の形象が、ひとつの原風景として意識の奥深くに刻まれていたということだろう。いわば、ハーンの中では幼年期以来、この原風景が核となって、自分を押しつぶそうとするカトリック教会、ひいては西欧文明そのものと、成長繁茂する鬱蒼たる樹々のイメージとが分かちがたく結びついて、恐怖と圧迫感、靈性と力が渾然一体とした印象を形成していったのではないだろうか。だから西インド諸島でも、高く聳える森の樹々に対して記憶の中の教会のイメージを重ねたからこそ、思わず身を引きたくなるような恐怖を感じた。熱帯の木々の描写には、実際の風土以上に、ハーンの内面的投影が大きく作用したにちがいない。

聖なる樹々（下）

ところで、先述したアンデルセンにも、やはり樹木の「上へ上へと伸びていく動き」を描いた作品がある。「年
老いた櫟の木の最後の夢⁽²⁹⁾」という、海辺の崖の上の森の中にひとときわ高く立つ櫟の老樹の物語である。

夏、三百六十五歳の櫟の木のまわりをかげろうが飛び交い、万物は命の長さに関わりなく皆同じようにそれぞれ
の生を享受したのち永遠の中に帰っていくのだと語る。やがて季節がめぐって、櫟の木は冬の眠りにつく。そ
してクリスマス・イブの夜、冬の嵐が荒れ狂う中で老櫟の木は美しい夢をみる。長い年月の間の出来事が走馬燈
のように過ぎていく夢である。その時、老樹は一番下の細い根から新しい命の流れが登ってくるのを感じる。そ
の流れはさらに上へ上へと昇っていつて枝葉の先々にまで達し、そのうち体全体に力があふれ、太陽の方へと伸
び始める。老樹は森中の他の木や草や花もみな同じように成長しているのがわかって感激する。光と喜びに包ま
れながら、自分の根が地面から離れ始めたのに気付いた時、雪の中に櫟の木は倒れる。そして嵐が静まった翌
朝、教会のクリスマスの讃美歌が森に響きわたる。

ここで最後にクライマックスとして描かれる老樹の夢を際立たせるのは、森全体が空へと向かって上昇してい
く動きである。そしてそこに讃美歌が響きわたることで、まるで森そのものが巨大な大聖堂の内陣と化したかの
ような印象が残る。ハーンとアンデルセンが共に、森の樹々の生命感を上昇する動きの中にとらえていること、
しかもそれが教会の形に何らか関わっていることは興味深い。ただ、ハーンの場合は、教会内陣の植物的な上昇
の動きが異様な力をもって圧迫してくるよう感じられた。それに対してアンデルセンは、そこに最後にキリス
ト教的な昇天と歓喜のイメージを重ねるのである。

美術史家のヴィルヘルム・ヴォリンガーは後に『ゴシック美術形式論』（一九一一年）の中で、ゴシック教会の

内部建築を特徴づけるのは、「ゴシックの線」のもつ抽象的でありながら強烈な生命力とその上昇運動のリズムであると論じた⁽³⁰⁾。そしてヴォリンガーの説が興味深いのは、この「空想的で激情的な線」の形象が、キリスト教受容以前の北方ゲルマン民旅の宗教感情に根ざしていることを指摘した点である。つまり、キリスト教信仰の視覚的表現に他ならないとみなされてきたゴシック様式の教会建築が、精霊にみちた「森の神秘の暗闇の中で思考された」⁽³¹⁾形の面影をとどめている。いわば隠れた地下水のように、はるか古代に遡る異教の記憶が人々の無意識の深層に脈々と流れていることを暗に示唆したわけである。

アンデルセンの「年老いた樅の木最後の夢」は、クリスマスの物語らしく讚美歌でしめくられるが、物語の中心をなすのは、あくまでも樹齢をへた樅の木であり、森の生命力である。また、先に引いた「柳の樹の下で」においても、異国で倒れた若者を抱き上げ、故郷めざして飛翔していく柳の老樹は、実はその村の教会の傍らに立つ樹であったことが物語の最後になってわかり、キリスト教的な救いが暗示されるのだが、通奏低音のように主人公を支えるのは、力強い老人の姿に化身する柳の樹霊なのである。そしてその樹霊は、たとえば前回言及したW・C・ランダーの樅の木の精のように人間と対峙する存在ではなく、人の生から死までを見守り、人が最後に帰すべきところとして描かれている。

ハーンがアンデルセンの作品を読んで「心の中が感動で渦巻いた」(チェンバレン宛前出書簡)、少なくとも一つの要素は、アンデルセンがはからずも描いた、このような聖なる樹木の姿にあつたのではないだろうか。

ハーンが樹木の霊性を直視したのは西インド諸島においてであり、はじめて安らぐことのできるような樹木の姿を文章に描いたのは、日本に来てからである。樹木に象徴される自然の根源的な生命力との交わりに強くひか

聖なる樹々（下）

れる気持がハーンの中には元々あったものの、その樹木のイメージをおおっていた、ハーンの言う「ゴシックの恐怖」を取り除くには、西洋世界を離れる必要があったということだろう。

西インド諸島の熱帯の森で、心理的な況縛の実体を自覚し、そして来日後、自然の万物に靈魂が宿るとする日本古来の精神風土や、様々な民俗、伝説にあらわれた日本人の樹木観そのものに感じ入り、共感することで、ハーンは素直に樹々の世界にうちとけることが可能となった。そして春の桜の花の美しさに、また神社や寺など樹木に囲まれた聖なる空間に、人と樹木がこまやかに心通いあう関係を見出し、樹霊と人間が結ばれる物語を再話した。「青柳物語」や「十六桜」の樹木が象徴するのは、人間をいざない、包み込むような樹々の世界である。そしてそこに来日前とは異なるハーンの心理や精神状況が反映された面があるともていい。

ただし、ハーンはこれら樹霊の物語を、西洋に対峙する反西洋の自然観のあらわれとして、また樹木と人間が同質の、同じ靈魂を共有するゆえの密な繋がり証として再話したのではあるまい。

「青柳物語」の中の愛と信頼の物語は、その清らかさの点で、およそお伽話の枠の中でしか存在しえない世界として、ハーンは枠組みの中の劇中劇の形で提示して見せる。その劇中劇の中で、樹の妖精である青柳は、死ぬ時、来世もまた友忠とめぐりあい、結ばれることを誓う。だが、かたや、人間としての生を終えつつある「十六桜」の老武士は、子供たちにも先立たれ、「この世に愛するものはこの樹を置いてほかにない」という心境であった。そして再び人間として生まれかわることははや望まないのである。そして、そうした人間の営みが繰り返されるのを見守ってきた樹木の方と一体化し、その樹霊と化す道を選ぶ。老武士にとって桜の樹は、自分の生きてきた年月、先祖代々に遡る過去の年月を包みこむだけではなく、そのような生が反復される輪廻転生の輪を

超越し、離脱した存在として浮上したからではないか。

十九世紀末の芸術に、蔓や蔦、繁茂する樹々など、植物の表象が好んで用いられたことはよく知られている。前述したように、「青柳物語」の青柳の描き方にもその影響はみられ、またハーンの熱帯の樹々の描写でも枝葉が絡みあう曲線が強調されている。教会の中の線の形象に注目したヴォリンガーの説自体、世紀末芸術と同じ時代背景の中に位置づけられるのかもしれない。樹木という存在、草木のしなやかな曲線や渦巻き模様に対する時代の嗜好には、西洋近代社会の何らかのアンチテーゼと人々の渴望がこめられているのだろう。ハーンの描く樹々の世界も、そのような世紀末の幻想に通底している。

大地に深く根ざし、天に向かつてのびる樹々は、人間や動物のように音や言葉を発することもなく、みずからの意志で動くこともない。それなのに、あるいはそれゆえにこそ自然の根源に通じ、人間が太古に失ったものを保持し、存在の永遠性をかちえている。植物の静かで受け身の生に、人は、人間をも含めた動物とは全く別様の生の有り方をみいだし、救いと癒しを求めるのかもしれない。そして、ハーンの「青柳物語」と「十六桜」には、近代的な人間のあり方とは対極にあるそのような樹々の世界との結合がたしかに描かれている。

再話文学の面白さは、古い物語が過去の記憶を内包しつつ、いかに時代の新たな衣をまとって蘇生したかという点にある。西洋と日本というふたつの文化にまたがって世紀末の時代を生きたラフカディオ・ハーンの再話作品では、日本の原話の世界に西洋の想像力の伝統が照射され、その中から、両者をふまえながらも、いずれとも異なる新たな物語がつくりだされている。そこにこそ、ハーンの物語の奥深さと尽きない興味が感じられるのである。

聖なる樹々（下）

〔注〕

〔13〕 平川祐弘訳「十六桜」『小泉八雲名作選集 怪談・奇談』（講談社学術文庫）一九九〇年、一〇〇頁。なお、一部語句を変えた箇所もある。

〔14〕 “Jiu-Roku-Zakura”, *The Writings of Lafcadio Hearn, vol. II*, reproduced by Rinsen Book Co. p. 245.

〔15〕 「十六日櫻」、『小泉八雲名作選集 怪談・奇談』巻末「原拠」三九七頁、

〔16〕 日野巖『植物怪異伝説新考』、有明書房、昭和五十三年、三三六頁、による。

なお、この『諸国怪人談』の記事には、伊予国の和氣郡となっており、また寺の住職が「実よりこの桜を植えてわが子桜と寵愛せり」とあって、あるいはハーンはこちらの記述をも参照したかもしれない。ただしヘルン文庫には所載されていない。

〔17〕 『平家物語全注釈』上、富倉徳次郎、角川書店、昭和四十一年、七九頁

〔18〕 仙北谷晃「身代わりの人」『人生の教師ラファディオ・ハーン』、恒文社、一九九六年

〔19〕 マンフレート・ルルカー『シンボルとしての樹木』林捷訳、法政大学出版、一九九四年、二二二頁

〔20〕 Alexander Porteous, *Forest Folklore, Mythology and Romance*, Unwin Bros. Ltd., London, 1928, p. 277, 179.

トリストランとイゾルデの場合は墓に植えられた葡萄と薔薇の蔓が生い茂り絡みあう。

同様の説話がノルウェーにも中国にもトネリコ、西洋杉と樹は異なるが伝わっている。

なお、中国のこの説話は次のグベルナティスの書から引用されている。

また、伊藤亮輔氏がハーンの「十六桜」にはアイルランド伝説「悲運のディアドラ」の影響が認められると指摘されている。（怪談「十六桜」とアイルランド伝説『へるん』三十一号、一九九四年）「悲運のディアドラ」は、引き裂かれた夫婦が死後、イチイの樹と化して枝がからみあう。

- (21) Angelo de Gubernatis, *La Mythologie des Plantes ou Les Legendes du Règne Végétal*, Paris, Reinwald, 1878.
- (22) チェンバレン宛手紙、一八九五年神戸。同右著作集 第十五卷（書簡）、三〇九頁
- (23) 「散文芸術論」『ラフカディオ・ハーン著作集 第七卷 文学の解釈Ⅱ』、恒文社、六五頁
- (24) 高橋健二訳『アンデルセン童話集』第三卷所収、小学館、昭和五十五年
- (25) 『アイテム』一八七九年十一月一日。『小泉八雲名作選集 クレオール物語』講談社学術文庫、一九九一年、所収
- (26) “Midsummer Trip to the Tropics”, *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 3, pp. 53-54.
- (27) “La Guiblese”, *Ibid.*, p. 222.
- (28) 平川祐弘訳「ゴシックの恐怖」、『小泉八雲名作選集 怪談・奇談』、三二八—三二七頁
- (29) 前掲書所収
- (30) ヴィルヘルム・ヴォリンガー『ゴシック美術形式論』中野勇訳、岩崎美術社、一九六八年、七九頁
- (31) 同右、八五頁